

シリーズ—研究者の横顔 (Vol.02) —

心理学グループ
大石幸二先生



大石先生の専門は「障がい児（者）心理学」。今回の『研究者紹介』では、趣向を変えて授業にお邪魔してみました。これまでに行われてきた大石先生ご自身の研究や事例検討から、障がい児（者）と彼らを取り巻く環境との関係を考える内容でした。

■ 知識・技術・経験…ゼミ生それぞれの特性に合わせたゼミ運営

今年、大石ゼミに入った新3年生は3名。大石先生のゼミは、臨床活動を行うために金・土と、週末の2日間時間的に拘束されるという。知識も技術も経験も異なる3名には、この授業と臨床活動を通して、それぞれが持つ強みを伸ばし、成長していったほしいと考えているとのことだ。そのためには「アセスメントが大切」と大石先生は言う。それぞれの特性を捉え、多様性を大切にしながらゼミを運営したいとの考えだ。



机上の学習だけでなく、土曜日には実際にお子さんに関わり、その子の特性に合わせて支援計画をたて、実践する。

■ 研究知見を実際の現場で起こる問題の解決に活かす

自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症を含む発達しょうがいの疑われる児童生徒には特有の反応が見られるという。「習字の作品で、必ず文字が擦れてしまう子ども。どんな原因が考えられる?」「教室で困っている子どもだけを気にかけてばかりでは、他の児童生徒は不平等感を感じてしまう。では、教師はどんな関わりをすれば良いと思う?」・・・大石先生から時折投げかけられる学校現場における発達支援をめぐる諸問題に、学生たちは悩



みながらも真剣に向き合い応じていた。きっとブランディング研究の成果も、こんなふうに教育活動に還元されていくのだろう。



真剣な眼差しで授業を受けるゼミ生たち。時折笑い声もあがり、和やかな雰囲気です。

4/27に授業の様子取材させていただきました。授業の様子や学生とのやりとりを拝見することで、先生の研究領域の奥深さを知ることができました。今後の研究のさらなるご発展をお祈りしています。(取材担当：教育研究コーディネーター 坂本真季)